

家事分担に関する研究(3)

—妻の就業形態と夫妻間の勢力・役割・情緒関係—

坂田桐子・黒川正流

広島大学総合科学部人間行動研究講座
(1990年10月31日受理)

How husbands and wives share things to do (3)

— Effects of wives' working status on power relations, divisions of domestic duties, and emotional factors between husbands and wives —

Kiriko SAKATA and Masaru KUROKAWA

【Abstract】

This study examined (a) the effect of wives' working status on the relationships and power relations between husbands and wives and (b) the interrelations of power, divisions of domestic duties, and emotional factors. Those 215 couples which wives were 30-49 years old answered questionnaire. The following results were obtained: (a) Full-time working wives took part in less domestic duties than part-time working wives or housewives. This tendency was due to wives' psychological factors (e. g., attaching importance to work) rather than long working hours. (b) There were no relations between wives' working status and power or emotional factors of husbands and wives. (c) Those who took part in more 'outside duties' had more decision power. (d) Divisions of domestic duties related to satisfaction with spouse.

It was hypothesized that wives' working status influenced directly divisions of domestic duties, and it effected on power relations and emotional factors.

問 題

わが国の雇用者総数に占める女子の割合は近年増加傾向が続いている。平成元年版「婦人労働の実情」(労働省婦人局, 1990)によれば, 雇用者総数に占める女子の割合は, 1987年で36.5%, 1988年では36.8%である。中でも, 有配偶女性は非農林業女子雇用者全体の58.5%と, 半数以上を占めている。しかし, 全体的に見ると家事の省力化・合理化によって家事に費やされる時間は減少している。女性が「職業か家庭か」という二者択一を迫られることが少なくなりつつあるとあってよいであろう。さらに, 雇用機会均等法の施行, パートタイム市場の拡大など, 女性の社会進出を促す状況が進行している。このような社会的動向に伴って, 家庭における夫と妻の役割にも当然それに相応する変化が見られるはずである。妻が社会に出て

いくことは、家庭における夫妻関係にどのような影響を与えるのであろうか。黒川・坂田(1988)および坂田・黒川(1989)(以下、それぞれ第1報、第2報とする)は、このような視点から夫と妻の役割分担と勢力関係を吟味した。この2報告から得られた知見は以下の通りである。①妻の就業の有無に関わらず、大部分の家事は主として妻が行っており、夫の役割とされる家事はわずかである。②妻の勢力は就業前に比べて就業後に増大し、妻の家事負担が減る。③妻の就業に関連する要因の中でも、就業理由と就業時間は夫妻の勢力構成や家事実行度に関係しない。妻の収入が家計に占める割合が大きいほど妻の勢力は大きくなるが、同時に夫領域の家事を妻が実行する程度も増大する。④女性の役割に対する態度(性役割態度)は異性の領域の家事実行度に関連しており、従来の性役割観にとらわれない非伝統型の妻や夫は家事を対等に実行するものが多い。しかし、性役割態度と勢力との間には明確な関連が見られない。⑤パート的な性質を持つ保険外交員(第2報)の方が一般の就業既婚女性(第1報)よりも家事実行度が高かったことから、妻の就業観や就業に対する態度などの心理的変数が家事実行度に影響を与える可能性が示唆される。以上の知見から、妻の就業は妻の家事負担を軽減し、勢力を増大させることが伺える。さらに、妻の就業に関連する要因の中でも、「家計を支える」という側面と、「妻の就業観・就業態度」が家事実行度や勢力を左右すると考えられる。

そこで、本研究では、妻が現在フルタイムで就業している夫妻、妻がパートで就業している夫妻および家事専門の夫妻を対象とし、妻の就業形態や就業態度と夫妻関係との関連を検討することを第一の目的とした。第2報では、夫妻関係を勢力関係と役割分担という2側面から捉えたが、夫妻関係を包括的に捉えるには情緒面を考慮することが不可欠である。そこで、今回は配偶者への期待や満足度についても測定し、夫妻関係を勢力、役割、情緒の3側面から考察することにする。

男性と同じように定職を持つ妻とパートとして働く妻とでは、家庭や仕事に対する意識は大きく異なるであろう。労働省の報告によれば、有配偶のパートタイマーが今の仕事についている理由は、「勤務時間帯や勤務日を自分の都合に合わせてられる」48.3%、「家事・育児等の事情で通常労働者として勤務できない」28.4%などである。「通常の労働者としての仕事がなかった」とする者は9.7%であり、やむを得ずパートタイマーになっている者は10人に一人程度である。また、「今の仕事を続けたい」とする者が89.4%と9割近くを占めている(労働省「パートタイム労働実態報告」1985年)。すなわち、パートタイマーには「家事・育児に支障をきたさないように、あくまでも家庭が主で外の仕事は従」という、家事専門の妻と変わらない家庭中心の姿勢が認められる。このような妻の意識は、当然夫の態度にも反映するであろう。すなわち、妻がパートで働いている家庭では「夫は仕事、妻は家庭」式の性役割分担が崩れておらず、妻の家事実行度は家事専門者と変わらず高いであろう。一方、妻が夫と同様にフルタイムで就業し、仕事を家庭と同様に重要視していれば、家事負担も勢力も夫妻が同等に有する傾向があると考えられる。

本研究の第二の目的は、夫妻間の勢力、役割および情緒関係という3変数間の相互関係を吟味することである。家事を分担する人物が家庭内の決定権を握るという傾向は第2報から示唆されている。今回はその傾向を確かめると共に、それらと情緒関係との関連をも検討し、妻の就業という社会的傾向が夫妻関係に及ぼす影響を考察する。

方 法

調査対象 30才代～40才代の既婚女性とその配偶者。夫・妻別々に無記名で質問紙に回答

させた。回答数は430(215組)であった。調査対象を30才代~40才代に限定した理由は、①妻の就業要因による影響の検討を目的としているため、結婚年数や世代差の影響はできるだけ排除する必要があったこと、②女子のパートタイム労働者はこの年齢層で多く(上記平成元年版「婦人労働の実状」によると全体の61.5%を占める)、標本が最も得られやすいと思われたこと、の2点である。

質問紙の構成 ①フェイス・シート 年齢、家族構成、配偶者との結婚生活歴、夫の就業形態、妻の就業形態(フルタイム、アルバイト・パート、家事専業)。なお、妻の就業形態については、就業意識という心理的側面からの把握を目的としたため、勤務時間による定義を行わず、回答者の認知にまかせた。

②妻の就業に関する質問(妻のみ回答) フルタイムかパートで働く妻につきの事項を質問した。妻の収入が家計に占める割合、現在の職業の継続期間、一週間当りの労働時間、就業理由、現在の仕事に対する評価(対人関係・能力の発揮・仕事内容に対する興味・給与・継続の意志)。

③勢力関係 第2報と同様、家庭における決定権の大きさを勢力の指標とした。Wolfe(1959)、伊藤(1986)らの研究に基づいて家庭における決定事項16項目を取り上げ、それぞれを誰が決定しているかを「夫の意見が絶対的(1)~妻の意見が絶対的(5)」の5段階尺度で評定させた。今回の調査では、この16項目が勢力関係の指標として適当であるかを検討するため、16項目について理想的には誰が決定するのがよいと思うかを質問した。また、認知上の勢力と比較するため、家庭の中で誰がリーダーシップをとっているかを直接質問した。

④役割分担 家庭内で行われるさまざまな仕事18項目について、それぞれを「夫がする(-3)~妻がする(3)」の7段階尺度で評定させた。項目の選定は第1報、第2報に基づいて行った。さらに、回答者自身の認知を知るため、夫の家事協力の程度を直接質問した。

⑤情緒変数 情緒変数として、以下の5側面を測定した。(a)配偶者への役割期待と期待充足度の評定:収入を得て家計を賄う役割1項目、家事遂行の役割3項目、心理的受容(情緒的支持)役割4項目それぞれを、配偶者にどの程度期待するか、またどの程度現実に遂行されているかを5段階で評定させた。項目の選定には伊藤(1988)を参考にした。(b)自分に対する役割期待と期待充足度の評定:(a)で用いた役割項目について、それぞれを自分はどの程度すべきだと思うか、また実際にはどの程度実行できているかを5段階で評定させた。(c)生活重要度:レジャー・地域社会・仕事・宗教・家族という5つの主要な生活領域に対して、それぞれの重要度を合計100点になるように点数配分させた。(d)生活満足度:家庭関係・経済的状況・自己実現・夫妻関係・生活全体のそれぞれについて、「非常に満足(1)~非常に不満(7)」の7段階尺度で評定させた。(e)配偶者に対する満足度:N. Sinnet et al. の Marital Need Satisfaction Scale に基づいて袖井ら(1987)が作成した結婚満足度尺度を用いた。これは、行動面よりもむしろ情緒的・精神的側面の充足感を測定するものである。各項目がどの程度当てはまるかについて、「非常にあてはまる(1)~全くあてはまらない(5)」の5段階で評定させた。

⑥一般的な性役割態度 Spence et al. (1978) の Attitudes Toward Women Scale を用いた。これは、女性の持つべき役割や権利についての考えを示した記述15項目について、「全く賛成~全く反対」の4段階尺度で回答させるものである。得点が高いほど男女平等的な態度、低いほど伝統的な性役割を重んじる態度であると判断される。

結 果

①回答者の属性：妻の年齢はすべて30～49才までの範囲に入っているが、夫についてはこの範囲外に29才以下の者が1.4%，50～59才の者が9.5%含まれている。結婚生活年数は11～20年が最も多く67%を占めており、21年以上と10年以下はそれぞれ15%であった。同居家族については、小学生以下の子供がいる者約45%，中学生以下の子供がいる者約50%，夫か妻の親がいる者約35%であった。

②妻の仕事に関する側面：妻の就業形態の割合は、妻の回答によると、フルタイム41.6%，アルバイト・パート15.8%，家事専業42.5%である。一方、夫の回答ではフルタイム39.5%，アルバイト・パート19.5%，家事専業40.9%となっており、妻自身の認知とはわずかに食い違いを見せている。妻の就業形態別に仕事に関する変数を集計した結果をTable 1に示す。まず就業理由を見ると、フルタイムでは「家計を維持するため(20.8%)」が最も多く、次いで「生計を維持するため(15.7%)」，「将来に備え貯蓄するため(10.7%)」となっており、経済的な理由からの就業が多い。また、「仕事をするのが当然(10.7%)」という男性と同様の就業姿勢を持つものも目だつ。一方、パートタイムでは「時間的に余裕があるから(22.9%)」が最も多く、次いで「家計を維持するため(20.0%)」「自分で自由に使えるお金を得るため(15.7%)」となっている。フルタイムに比べ、家計のためというよりも妻自身の個人的な理由から就業している割合が多い。ここにはフルタイムとパートタイムの就業姿勢の違いがはっきり表れている。現在の仕事に対する評価は、5段階評定でいずれも3.0前後と可もなく不可もなくといった感があるが、全体的にややフルタイムの方が高めである。一週間当りの妻の労働時間および勤続年数については、当然のことながらフルタイムの方が長い。この傾向に伴って、妻の収入が家計に占める割合も、フルタイムの方が全体的に大きい。しかし、妻の収入が家計支出の7割以上を占めているものは少ない。

以下の分析では、妻の就業に関する要因として、就業形態、就業理由、および一週間当りの労働時間を取り上げ、夫妻関係の各変数との関連を適宜検討する。就業理由については、家庭全体に関わる経済的な理由である「生計維持」と、漠然とした個人的な理由である「時間的余裕」の2つを取り上げ、これを独立変数とする。労働時間については30時間未満の短時間群と30時間以上の長時間群の2群に分類した。なお、妻の収入が家計に占める割合については3割以下の者がほぼ50%近くを占めており、分類が困難であったため、今回の分析から外した。

③勢力関係：実際と理想の決定権について決定事項16項目それぞれの度数分布を算出した(Table 2)。全体的に、夫か妻のどちらかに回答分布が偏っている項目は少なく、決定権の大きさ自体は夫妻均等であることが伺える。また、理想的にも夫と妻が対等な決定を行うのがよいと考えられているようである。この傾向を確認するため、Wolfe(1956)および伊藤(1987)の方法によって勢力類型化を行った。妻の回答によると、夫の決定権が大きい夫優位型は9.6%，妻の決定権が大きい妻優位型は15.4%，決定権の大きさは同じであるが役割を明確に分担している自律型は37.0%，決定権の大きさが同じで何もかも一緒に行う協調型が38.0%となった。夫の回答では、夫優位型12.0%，妻優位型11.5%，自律型34.1%，協調型42.3%である。いずれにせよ決定権の大きさが夫または妻のどちらかに偏っているものは少ない。また、勢力類型別に〔理想の決定－現実の決定〕の平均値を算出し、一元配置の分散分析を行ってみたところ、夫・妻の回答共に有意な結果が得られた(夫： $F(3,201) = 18.47, p < .001$ ，妻： $F(3,203) = 55.65, p < .001$)。平均値は、符号がプラスであれば実際の方が期待よりも夫

Table 1. 妻の就業に関する変数 (回答は妻のみ)

	全体 %	フルタイム (91人)%	パートタイム (35人)%
就業理由			
1. 生計を維持するため	13.3	15.7	7.1
2. 家計を維持するため	20.6	20.8	20.0
3. 将来に備え貯蓄するため	8.1	10.7	1.4
4. ローンの支払いに当てるため	3.6	3.4	4.3
5. 自分で自由に使えるお金を得るため	11.3	9.6	15.7
6. 能力・技能・資格を活かすため	3.2	3.4	2.9
7. 自分を成長させたいから	3.6	2.8	5.7
8. 社会や他人とのつながりを持つ	9.3	9.6	8.6
9. 仕事をするのが当然だと思うから	8.5	10.7	2.9
10. 仕事をするのが楽しい・好きだから	4.8	5.1	4.3
11. 時間的に余裕があるから	8.1	2.2	22.9
12. 仕事が家業であるから	4.0	4.5	2.9
13. その他	1.2	1.7	0.0
14. 特に理由はない・わからない	0.4	0.0	1.4
勤続年数			
6年未満	30.3	15.4	68.6
6～10年	15.1	13.2	20.1
11～15年	21.5	25.3	11.4
16～20年	13.6	18.7	0.0
20～25年	15.2	20.9	0.0
26年以上	4.8	6.6	0.0
一週間当りの労働時間			
11時間未満	15.2	11.0	26.5
11～20時間	8.8	4.4	20.5
21～30時間	10.4	5.5	23.4
31～40時間	10.4	12.1	5.8
41～50時間	32.8	38.5	17.5
51～60時間	13.6	17.6	2.9
61時間以上	8.8	11.0	2.9
妻の収入が家計支出に占める割合			
ほぼ全部	7.3	5.6	11.4
9～7割	6.5	5.6	8.6
6～4割	37.1	50.6	2.9
3～1割	40.3	36.0	51.4
0割	8.9	2.2	25.7
現在の仕事についての気持ち^a			
	フルタイム 平均 (S D)	パートタイム 平均 (S D)	
1. よい対人関係 (上司・同僚) がある	3.3 (1.05)	3.5 (1.11)	
2. 自分の技術や能力を十分活かせる	3.2 (1.09)	2.9 (1.11)	
3. 仕事の内容に興味を持てる	3.3 (1.08)	3.0 (1.10)	
4. 収入 (給料) には満足している	3.0 (1.08)	2.8 (1.11)	
5. 今の仕事を続けたい	3.6 (1.15)	3.2 (1.13)	

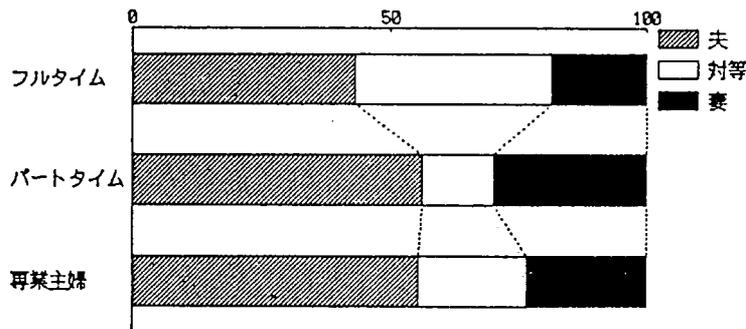
a. 「非常にそう思う(5)ー全く思わない(1)」

Table 2. 家庭生活における現実の決定と理想の決定

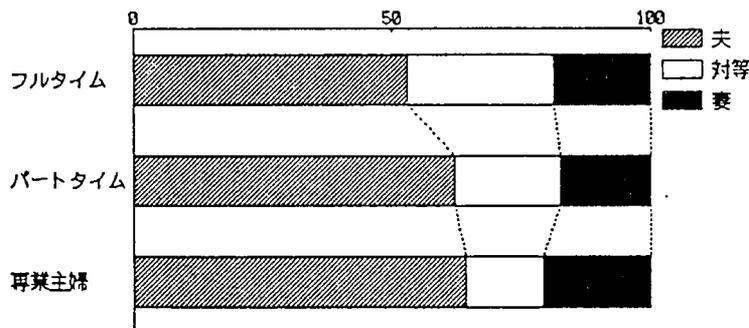
項 目	夫の回答 (%)				妻の回答 (%)							
	現実		理想		現実		理想					
	夫	妻	夫	妻	夫	妻	夫	妻				
1. どんな車 (家族で使う) を買うか決める	82.6	12.8	4.6	43.5	56.5	0.0	82.6	16.0	1.4	27.2	72.4	0.5
2. どんな家を買う (借りる) か決める	39.4	41.3	19.2	14.6	84.0	1.4	37.8	49.3	12.9	8.2	90.9	0.9
3. どんなテレビやビデオを買うか決める	53.2	30.7	16.1	14.9	81.9	3.3	50.2	39.3	10.5	7.3	90.8	1.8
4. どんな冷蔵庫や洗濯機を買うか決める	11.0	16.9	72.1	2.8	60.5	36.7	9.5	16.8	73.6	1.4	62.6	36.1
5. 夫の使うこづかいの金額を決める	51.4	31.2	17.4	31.2	66.5	2.3	45.6	31.3	23.0	8.2	88.6	3.2
6. 妻の使うこづかいの金額を決める	11.9	24.8	63.3	6.0	72.6	21.4	5.5	27.1	67.4	0.0	81.3	18.7
7. テレビのチャンネルを決める	49.5	39.9	10.6	16.4	82.2	1.4	47.7	44.1	8.2	2.3	96.3	1.4
8. 貯蓄の金額と方法を決める	21.7	25.8	52.5	10.2	74.0	15.3	21.0	28.3	50.7	4.6	85.8	9.6
9. 知人からの借金の依頼をどうするか決める	47.5	39.6	12.9	19.4	78.7	1.9	41.6	47.2	11.2	11.9	86.7	1.4
10. 一ヶ月の生活費を決める	9.6	22.5	67.9	4.6	74.5	20.4	7.3	29.7	63.0	1.8	83.0	15.1
11. 親類への中元・歳暮の進物品や慶弔の範囲や金額を決める	20.1	42.0	37.9	8.3	81.5	10.2	15.5	41.4	43.2	1.4	89.4	9.2
12. 家族の生命保険の加入を決める	30.6	35.2	34.2	9.7	83.8	6.5	36.4	34.1	29.5	6.0	91.3	2.8
13. 財産の売買を決める	47.2	45.8	6.9	23.9	75.1	0.9	55.6	42.1	2.3	14.7	85.3	0.0
14. 子供の進学、あるいは就職を決める	18.9	71.0	10.1	7.0	92.5	0.5	17.5	75.6	6.9	1.8	97.7	0.5
15. 家族づれの休日の旅行・遊びの日時や場所を決める	31.5	44.7	23.7	7.9	89.8	2.3	19.6	56.6	23.7	1.8	97.3	0.9
16. 法事などの、家に客を招く行事の日取りや方法を定める	27.5	49.5	22.9	11.1	84.3	4.6	21.4	62.7	15.9	1.8	97.7	0.5

現実の決定については、「1. 夫」「2. どちらかといえば夫」「夫」、「4. どちらかといえば妻」「5. 妻」を「妻」とした。
 理想の決定については、「-3. 夫」「-2. おおむね夫」を「夫」、「-1. どちらかといえば夫」「0. 対等」「1. どちらかといえば妻」を「対等」、「2. おおむね妻」「3. 妻」を「妻」とした。

Fig. 1. 夫と妻のどちらがリーダーシップをとるか (夫の回答)



夫と妻のどちらがリーダーシップをとるか (妻の回答)



に偏っており、マイナスであれば実際の方が期待よりも妻に偏っていることを示す。両者とも、夫優位型 (夫： $\bar{x}=4.26$, 妻： $\bar{x}=8.25$) と妻優位型 (夫： $\bar{x}=-5.33$, 妻： $\bar{x}=-6.28$) では理想と現実の差が大きい。一方、「家庭の中で誰がリーダーシップをとっているか」という質問に対しては、夫、妻の回答ともに50%前後が「夫」もしくは「どちらかといえば夫」と答えている (Fig.1)。実際の決定権を夫妻が対等に所有していても、意識の上ではやはり夫が一家のリーダーと見なされている。これらの傾向は妻の就業形態に関わらず全般的に見られている。決定項目の因子構造を見るために、決定に重要性が乏しいと思われる「テレビのチャンネル」と、回答に偏りのある「どんな車を買うか」「子どもの進学・就職」の3項目を除いた13項目について、主因子法による因子の抽出を行った。固有値1以上の因子は4因子抽出されたが、固有値の大きさから判断して1因子構造と見なした。この13項目について「夫の意見が絶対的」を1点～「妻の意見が絶対的」を5点として簡便因子得点を求め、勢力得点とした。

妻の就業要因との関連を見るために、まず妻の就業形態別に平均得点を算出し、一元配置の分散分析を行ったが、夫の認知・妻の認知ともに有意な結果は得られなかった。つぎに、就業理由および労働時間を独立変数としてt検定を行ったが、有意な結果は得られなかった。妻の就業要因と夫妻間の勢力関係との間には大きな関連が認められない。

Table 3. 家庭における役割分担

項 目	夫の回答 (%)			妻の回答 (%)		
	夫	対等	妻	夫	対等	妻
平均(SD)						
2. 炊事をする	0.0	11.4	88.6	0.0	9.5	90.5
1. 洗濯をする・洗濯物をたたむ	0.9	11.9	87.2	0.0	11.4	88.6
3. 食器を洗う	0.0	17.8	82.2	0.9	11.4	87.7
4. 日常の食料品の買物	0.0	16.0	84.0	0.0	10.9	89.1
5. 掃除機をかける	1.4	19.2	79.5	0.9	16.4	82.7
6. 布団のあげおろしをする	3.2	37.4	59.4	4.1	33.9	61.9
7. 夫の衣類の買物	15.2	43.8	41.0	9.6	44.5	45.9
平均(SD)						
2.3	27.9	69.9	1.91(1.28)	2.3	27.9	69.9
4.1	49.5	46.4	1.19(1.53)	4.1	49.5	46.4
3.6	70.9	25.5	0.61(1.31)	3.6	70.9	25.5
39.9	37.2	22.9	-0.39(2.16)	39.9	37.2	22.9
16.4	42.9	40.6	0.58(1.95)	16.4	42.9	40.6
5.0	73.2	21.8	0.44(1.28)	5.0	73.2	21.8
65.9	31.8	2.3	-1.91(1.34)	65.9	31.8	2.3
平均(SD)						
33.6	43.2	23.2	-0.43(2.09)	33.6	43.2	23.2
58.3	39.0	2.8	-1.69(1.48)	58.3	39.0	2.8
64.2	30.3	5.5	-1.78(1.54)	64.2	30.3	5.5
70.2	26.6	3.2	-2.04(1.37)	70.2	26.6	3.2
53.2	36.2	10.6	-1.19(1.75)	53.2	36.2	10.6
68.2	30.0	1.8	-1.94(1.30)	68.2	30.0	1.8
76.6	18.8	4.6	-2.06(1.43)	76.6	18.8	4.6
77.8	18.5	3.7	-2.13(1.38)	77.8	18.5	3.7

「-3.夫」「-2.おおむね夫」を「夫」、「-1.どちらかといえば夫」「0.対等」「1.どちらかといえば妻」を「対等」、「2.おおむね妻」「3.妻」を「妻」とした。

日常的な家事

家庭外との対応

その他の雑用

④役割分担：決定項目と同様の手順で因子分析を行ったところ、固有値1以上の因子が5因子抽出されたが、固有値の大きさと解釈可能性から因子数を3に限定し、バリマックス回転を行った。第1因子は炊事・洗濯などのいわゆる「日常的な家事」、第2因子は「家庭外との対応」、第3因子は非日常的な「その他の雑用」と解釈された。これらの因子ごとに各項目の平均値を算出した（Table 3）。全体的に、家庭の仕事は妻が行っているようである。夫が行うのは「11. 壊れた電気製品の修理」や「18. 結婚式や葬式の時、家族を代表」など、非日常的な仕事である。このような傾向は、第1報、第2報から一貫している。つぎに、「夫がする」を-3点、「妻がする」を+3点と得点化して簡便因子得点を求め、妻の就業形態別に各因子の平均得点を算出して一元配置の分散分析を行った。その結果、夫・妻の認知ともに「日常的な家事」（夫： $F(2,213) = 12.03, p < .000$, 妻： $F(2,214) = 11.92, p < .000$ ）と「家庭外との対応」（夫： $F(2,213) = 7.98, p < .000$, 妻： $F(2,214) = 6.76, p < .005$ ）の遂行度に有意差が認められた。いずれも妻がフルタイム就業の場合には他の2群に比べて夫の実行度が高い。妻の認知では、パートと家事専業の間にも有意差が認められた。この傾向は「夫は家事や育児に協力しているか」という質問に対する回答にもほぼ反映されており、フルタイムの妻を持つ夫の51.2%が「非常に協力する」「かなり協力する」と答えている。このような回答をした者はパートタイムの妻を持つ夫では38.1%、専業主婦の夫では32.6%である。また、妻も夫の回答を支持しており、フルタイムでは58.2%、パートタイムでは47.1%、家事専業では46.8%が、夫は家事に「非常に協力する」「かなり協力する」と答えている。妻がフルタイムで働いていると、妻の家事負担は小さくなり、夫の家事負担が増えるようである。就業理由については、「日常的な家事」に有意差が認められた（ $t = 2.12, p < .05$ ）。「時間的余裕」群（ $\bar{x} = 5.57$ ）の妻の方が「生計維持」群（ $\bar{x} = 4.48$ ）の妻よりも実行度が高い。労働時間については有意な結果が得られなかった。日常的に行われる家事の分担については、家事に割くことのできる時間の多少といった具体的な要因よりも、就業形態や就業理由などの心理的要因が関連しているようである。

⑤情緒変数 (a)役割期待と現実の一致度：配偶者および自分に対する役割期待については「非常に期待する」を5点～「全く期待しない」を1点、現実の遂行については「十分やっている」を5点～「全くやっていない」を1点と得点化した。平均得点の結果をTable 4, Table 5に示す。項目1は「収入を得る役割」、項目2～4は「家事遂行の役割」、項目5～8は「心理的受容の役割」である。まず、妻の「家事」と「心理的受容」について夫の回答を見ると、実際の遂行度の評価よりも期待値の方が高くなっている。また、妻自身も全ての項目について自分の行動をきびしく評価している。夫は妻に現状の遂行度よりも多くを期待しているようである。一方、夫の行動に対する評価を見ると、夫・妻とも「収入を得る」役割を最も強く期待しており、「家事」の役割に対する期待は低い。しかし、妻は夫の「収入を得る」以外の役割については実際よりも多くを期待しており、夫も自分の行動をきびしく評価している。つぎに、現実の遂行得点-期待得点=一致度として、8項目それぞれについて一致度を算出し、さらに「収入」「家事」「心理的受容」それぞれの合計得点を算出した。一致度得点は数値が大きいほど期待と現実が不一致であることを示し、また符号がマイナスであれば期待の方が現実より大きく、プラスであれば期待よりも現実の実行度の方が大きいことを示す。これらを従属変数とし、妻の就業形態を独立変数として一元配置の分散分析を行った。妻の回答では自分に対する「収入を得る役割」で有意差が認められた（ $F(2,214) = 74.52, p < .001$ ）。一致度得点はフルタイム（ $\bar{x} = 0.16$ ）<パートタイム（ $\bar{x} = -0.35$ ）<家事専業（ $\bar{x} = -1.61$ ）となっており、家事専業の妻は自分が収入を得ていないことに引け目を持っているようである。一方、

夫の回答では配偶者に対する「収入を得る役割」で有意差が認められた ($F(2,213) = 46.35$, $p < .001$)。得点は家事専業 ($\bar{x} = -0.52$) < パートタイム ($\bar{x} = 0.37$) < フルタイム ($\bar{x} = 0.82$) となっており、家事専業の妻を持つ夫は妻に収入を得る役割を期待しているようである。「家事」と「心理的受容」については就業形態による違いは見られなかった。

(b)配偶者に対する満足度：結婚満足度尺度 13 項目について因子分析を行ったところ、1 因子構造であることが確認されたため、合計得点を満足度とした（得点領域は 13 ~ 65 点、得点

Table 4. 妻の行動に対する得点

項 目	妻 の 回 答		夫 の 回 答	
	妻の自己評価 平均(S D)	妻の自己目標 平均(S D)	妻への評価 平均(S D)	妻への期待 平均(S D)
1. 職業をもって、収入を得る	2.54 (1.41)	3.23 (0.97)	2.88 (1.58)	2.68 (1.21)
2. 家事を計画的に効率よく行う	3.52 (0.83)	3.80 (0.76)	3.64 (0.97)	3.74 (0.89)
3. 掃除や整理整頓をする	3.13 (0.85)	3.85 (0.78)	3.58 (1.01)	3.86 (0.89)
4. 家計の管理をする (家計簿をつける, 予算をたてる, 貯蓄をするなど)	3.09 (0.89)	3.78 (0.82)	3.32 (1.12)	3.72 (0.98)
5. 夫が寝ころんでいても、そっとしておく	3.77 (0.84)	3.93 (0.83)	3.57 (0.98)	3.81 (0.93)
6. 夫の趣味や娯楽を理解する	3.72 (0.88)	3.80 (0.82)	3.65 (0.95)	3.87 (0.98)
7. 意見が対立するとき、妻が妥協する	3.10 (0.80)	3.34 (0.76)	2.88 (0.92)	3.40 (1.01)
8. 友人や同僚が訪ねてきたとき、気持ちよく接待する	3.80 (0.84)	4.00 (0.79)	3.77 (0.91)	4.07 (0.88)

「全くやっていない(1) - 十分やっている(5)」 「全く期待しない(1) - 非常に期待する(5)」

Table 5. 夫の行動に対する得点

項 目	夫 の 回 答		妻 の 回 答	
	夫の自己評価 平均(S D)	夫の自己目標 平均(S D)	夫への評価 平均(S D)	夫への期待 平均(S D)
1. 職業を持って、収入を得る	4.11 (0.87)	4.56 (0.74)	4.54 (0.76)	4.40 (0.82)
2. 家事を計画的に効率よく行う	2.33 (0.99)	2.69 (1.06)	2.26 (1.03)	2.67 (0.96)
3. 掃除や整理整頓をする	2.23 (0.97)	2.58 (1.02)	2.20 (1.31)	2.58 (0.96)
4. 家計の管理をする (家計簿をつける, 予算をたてる, 貯蓄をするなど)	2.05 (1.01)	2.71 (1.03)	1.91 (1.12)	2.46 (1.01)
5. 妻が疲れて寝ころんでいても、そっとしておく	3.30 (0.89)	3.58 (0.87)	3.66 (0.99)	3.70 (1.03)
6. 妻の趣味や娯楽を理解する	3.41 (0.95)	3.70 (0.84)	3.63 (1.02)	3.78 (0.95)
7. 意見が対立するとき、夫が妥協する	2.98 (0.85)	2.92 (0.81)	2.75 (0.78)	3.11 (0.81)
8. 友人や同僚が訪ねてきたとき、気持ちよく接待する	3.50 (0.79)	3.86 (0.78)	3.67 (0.92)	3.73 (0.85)

「全くやっていない(1) - 十分やっている(5)」 「全く期待しない(1) - 非常に期待する(5)」

が高いほど満足度が高いことを示す)。全体的に、夫・妻とも満足度は高い(夫： $\bar{x} = 47.5$ ，妻： $\bar{x} = 45.9$)。妻の就業要因との関連を検討したが、有意な結果は得られなかった。

(c)生活重要度および満足度：各項目についての平均値を妻の就業形態別に示す (Table 6)。一元配置の分散分析を行ったところ、妻にとっての仕事の重要度 ($F(2,210) = 16.5$, $p < .001$) と家庭の重要度 ($F(2,210) = 6.69$, $p < .005$) に就業形態による差がみられた。仕事ではフルタイムの妻が最も高く ($\bar{x} = 34.3$)，家庭では最も低い ($\bar{x} = 42.1$)。しかし、フルタイム就業の妻でも仕事よりは家庭を重視しており、夫の態度との違いが表れている。パートタイム就業の妻は家族を重視することでは家事専業の妻と変わらない。夫は全体的に家族よりも仕事を重視しており、妻の就業形態による違いはみられなかった。

生活満足度については夫・妻とも全体的に高く、就業形態による差はみられない。

Table 6. 生活の各側面の重要度および満足度

	フルタイム		パートタイム		家事専業	
	夫 平均(S D)	妻 平均(S D)	夫 平均(S D)	妻 平均(S D)	夫 平均(S D)	妻 平均(S D)
<u>生活重要度</u>						
仕事	43.1(16.64)	34.3(16.32)	45.6(17.02)	24.4(19.04)	45.7(17.42)	18.5(19.74)
家族	30.3(14.69)	42.1(16.60)	28.6(11.46)	51.0(18.90)	32.3(15.86)	50.6(18.57)
レジャー	14.2(7.77)	13.8(8.03)	14.7(7.49)	14.7(8.22)	13.7(8.71)	18.8(11.60)
地域社会	8.6(8.06)	6.9(4.82)	7.4(7.65)	6.0(4.95)	6.0(5.79)	8.7(5.65)
宗教	3.6(7.93)	3.4(4.76)	3.7(3.99)	4.2(7.29)	2.3(3.72)	3.6(4.90)
<u>生活満足度</u>						
家族関係	5.3(1.46)	5.2(1.28)	5.5(1.20)	5.6(1.31)	5.5(1.40)	5.5(1.36)
経済的な状況	4.4(1.44)	4.5(1.06)	4.2(1.11)	4.3(1.34)	4.5(1.32)	4.8(1.43)
自分の人生のすごし方	4.3(1.46)	4.4(1.18)	4.1(0.98)	4.2(1.29)	4.2(1.49)	4.4(1.50)
全体としての生活	4.5(1.17)	4.6(1.04)	4.4(0.73)	4.6(1.11)	4.6(1.27)	4.7(1.16)

生活重要度については、各項目の重要度を合計100点になるように点数配分させた。

生活満足度については、「非常に満足(7)－非常に不満(1)」。

Table 7. 性役割態度得点

	夫 平均(S D)	妻 平均(S D)
	フルタイム	23.8 (6.08)
パートタイム	21.8 (5.86)	24.6 (4.97)
家事専業	22.0 (6.13)	26.2 (5.52)
合計	22.7 (6.10)	26.4 (5.65)

Fig. 2. 夫妻間の勢力関係に関連する要因 (妻の回答, 相関比 = .319)

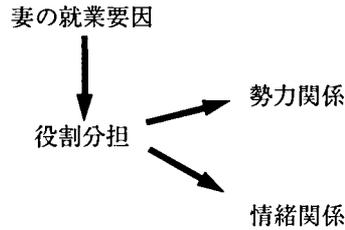
説明変数		偏相関係数	スコア	妻優位← -100.0 0 →夫優位 +100.0
1. 家事の遂行度 (対応)	1. 夫が主に分担	.356	64.47	
	2. 夫妻平等に		23.96	
	3. 妻が主に分担		- 79.67	
2. 結婚生活年数	1. 1~10年	.353	-171.52	
	2. 11~15年		- 1.56	
	3. 16~20年		- 57.88	
	4. 21年以上		64.80	
3. 夫への役割 期待 - 現実 (収入を得る)	1. 期待>現実	.207	54.87	
	2. 期待=現実		- 25.55	
	3. 期待<現実		34.05	
4. 一般的性役割 態度	1. 伝統型	.192	38.43	
	2. 平均型		5.52	
	3. フェミニスト型		- 39.60	
5. 妻の就業形態	1. フルタイム	.150	38.10	
	2. パートタイム		8.73	
	3. 家事専業		- 38.02	
6. 家事の遂行度 (日常的家事)	1. 夫妻で平等に	.146	- 10.97	
	2. おおむね妻		31.97	
	3. 妻		- 20.73	
7. 配偶者に対する 満足度	1. 低	.110	22.52	
	2. 中		- 14.73	
	3. 高		- 7.87	
8. 自分への役割 期待 - 現実 (収入を得る)	1. 期待>現実	.104	13.45	
	2. 期待=現実		- 4.36	
	3. 期待<現実		- 40.86	

Fig. 3. 夫の妻に対する満足度に関連する要因 (夫の回答, 相関比 = .269)

説明変数		偏相関係数	スコア	高←	→低	
				-100.0	0	+100.0
1. 妻への役割期待-現実 (心理的受容)	1. 期待>現実	.329	46.55			
	2. 期待=現実		-47.20			
	3. 期待<現実		-64.06			
2. 妻への役割期待-現実 (家事)	1. 期待>現実	.286	39.21			
	2. 期待=現実		-71.78			
	3. 期待<現実		-10.08			
3. 夫の家事協力	1. 非常に協力	.253	-22.09			
	2. かなり協力		-9.49			
	3. あまりしない		31.23			
	4. 協力しない		-94.16			
4. 結婚生活年数	1. 1~10年	.155	-12.02			
	2. 11~15年		-31.67			
	3. 16~20年		20.69			
	4. 21年以上		18.94			
5. 妻への役割期待-現実 (収入を得る)	1. 期待>現実	.121	-27.69			
	2. 期待=現実		-10.40			
	3. 期待<現実		26.53			
6. 勢力関係	1. 夫優位型	.092	4.76			
	2. 平等型		-18.05			
	3. 妻優位型		13.63			
7. 妻の就業形態	1. フルタイム	.067	10.21			
	2. パートタイム		5.60			
	3. 家事専業		-15.52			

⑥一般的性役割態度：15項目に対する回答を合計して個人ごとに性役割態度得点を算出し、妻の就業形態別に分散分析を行った (Table 7)。妻の性役割態度得点に有意差が認められた ($F(2,197) = 3.28, p < .05$)。フルタイムの妻が最も男女平等主義的であり、パートタイムの妻が最も伝統的である。夫についても妻と同様の傾向がみられるが、有意な結果は得られなかった。

Fig. 5. 妻の就業に関する要因と夫妻関係に関する仮説的モデル



強くなっている。「家庭外との対応」は夫の認知でも第3位にきており、決定権を握るのは日常的な家事や雑用の遂行者ではなく、「対応」を行う人物であることが示唆される。夫の認知に最も大きく関連しているのは一般的性役割態度である。男女平等的な態度の夫は妻の勢力が強いと認知している。夫・妻の認知ともに妻の就業形態との関連は強くないようである。また、説明率が低いため、勢力関係を説明するにはここで取り上げたもの以外の要因が必要であると考えられる。

(b) 役割分担を外的基準とした場合：「日常的な家事」実行度の分布の上位30%を妻の遂行度高群，下位30%を妻の遂行度低群として分類した。妻の認知では一般的性役割態度が第1位，夫の認知では妻の就業形態が第1位である。妻の家事実行度の認知を説明するのが妻自身の態度であるのに対し，夫の家事実行度の認知は妻の就業形態によるところが大きいと考えられる。

(c) 配偶者に対する満足度を外的基準とした場合 (Fig.3, Fig.4)：満足度の分布の上位30%を高満足群，下位30%を低満足群と分類した。妻の認知では，夫の家事協力の程度が第1位，夫への「家事」役割に対する期待と現実の一致度が第3位で効いている。夫の協力が得られている場合，また期待と現実が一致している場合に満足度は高くなっている。妻の就業形態は第2位であり，家事専門の妻は夫に対する満足度が高い。一方，夫の認知では妻への「心理的受容」役割の期待と現実の一致度が第1位で効いており，「家事」については第2位である。期待＝現実，期待<現実の場合に満足度は高い。夫は妻に心理的受容を求めるが，妻はそれよりも実際に家事を分担してくれることを夫に望んでいるようである。しかし，夫にとっては妻が家事をしてくれる（すなわち自分が家事を負担しなくてすむ）方が満足であり，この点に夫と妻の食い違いが表れている。家事をうまく分担することが夫妻の満足度を左右すると思われる。

考 察

妻の就業形態とそれに関連する要因は，夫妻間の勢力関係や配偶者への満足度とは直接関連せず，夫妻間の役割分担に影響するようである。しかも，物理的に家事に割く時間の多少といった具体的な要因よりも就業形態や就業理由といった心理的変数の影響が大きく，第2報から得られた示唆を支持している。第2報では就業後に妻の勢力が強くなっているが，今回はそれと一貫する結果は得られていない。第2報の結果は就業による変化というよりも，就業に伴う他の要因（結婚年数の増加など）の影響によるものであると考えられる。勢力関係については，決定権を夫妻同等に持つ自律型や協調型が多く，どちらか一方に決定権が偏る夫優位型と妻優位型はわずかであった。理想的には夫・妻同等に決定権を持つ方がよく，夫が妻の一方に決定

権が偏ることは望ましくないと考えられているようである。しかし、意識の上では一家のリーダーはやはり夫と考えられており、実際の決定権の所在とは微妙な食い違いを見せている。これらの結果から、これまで夫妻間の勢力関係の測度として一般に用いられてきた決定権の所在という変数だけでは、必ずしも全体的な勢力関係を把握できないと考えられる。今回取り上げた情緒変数とは関連が見られなかったが、今後分析を続けるとすれば、夫妻の相互依存関係等の心理的変数を考慮する必要がある。

3変数の相互関連の分析から、家事分担が勢力関係と配偶者への満足度に関連することが見いだされた。家事を行う人物が決定権を持つという傾向は第2報から示唆されているが、今回はさらに家事の中でもとりわけ「家庭の外との対応」を行う人物が決定権を持つという、新しい知見が得られた。勢力関係と家事分担については、性役割態度も大きな説明要因であった。しかも、第1報では性役割態度が異性の領域の家事実行度に影響することが示唆されたのに対し、今回は自分の領域の実行度にも影響することが示唆されている（「日常的な家事」は一般的には妻が行っており、妻自身の性役割態度がその実行度を左右している）。また、家事分担のあり方が夫妻相互の満足度に大きく影響することが示唆された。妻が夫に家事を分担してくれることを望む一方、夫の方は妻に心理的受容と家事の遂行を求めているようである。妻の就業形態が家事実行度に影響し、それがさらに満足度に影響すると考えると、フルタイム就業の妻は家事遂行度が低いため夫との間に情緒的な問題が生じやすいと思われる。役割期待と現実の一致度の結果からは、妻が働いて収入を得ること自体に問題を感じる夫妻は少ないと考えられる。従って、夫妻共にフルタイムで働く場合には夫妻間でうまく家事を分担することが重要であると考えられる。

以上の結果から、妻の就業に関する要因はまず夫妻間の役割分担に直接影響し、役割分担のあり方は勢力関係と情緒関係に影響するという仮説を導くことができる（Fig.5）。勢力と情緒変数の関連は本調査からは明らかでないが、今後検討して行くべき問題と言えよう。

第1報から本調査までを通して得られた主な知見を以下にまとめる。

(a)一般的に、家事はほとんど妻が行なっている。決定権は夫妻同等に所有しているにもかかわらず、意識上のリーダーは夫である。配偶者に対する満足度は高い。

(b)妻の就業は、夫妻間の家事分担のあり方に直接影響する。妻がフルタイムで就業している場合には、妻の家事実行度は低くなる。この傾向は妻の労働時間の長さによるものではなく、仕事の重要視といった心理的な変数によるものであると考えられる。

(c)妻の就業は、夫妻間の勢力関係や情緒関係には直接影響しない。ただし、妻の収入が勢力関係に影響する可能性は残されている。

(d)一般的性役割態度は、役割分担および勢力関係と関連する。

(e)家事を分担する人物が決定権を持つという可能性が示唆された。しかも、それは日常的な家事や雑用を行う人物ではなく、家庭の外との対応を行う人物である。

(f)家事分担のあり方は配偶者に対する満足度とも関連している。相互に相手が家事を行うことを望むようである。夫はそれに加えて妻に心理的受容をも求めている。

全般的に、意識レベルでは「男は仕事、女は家庭」式の伝統的性役割分業観がなお根強く残っていることが示唆されよう。しかし、フルタイム就業の妻には仕事を重視する姿勢や男女平等的な意識が伺える。仕事と家庭の両立を志す夫妻については、家事分担など実際の役割行動がまず変化することが予想される。しかし、パートタイムの妻や専業主婦の意識や行動は伝統的であり、しかもその現状に不満はないようである。夫妻関係に限って言うならば、従来の性役割観や性役割行動が今後崩れる方向に進むと言うよりは、個々人のライフスタイルに合わせ

て価値観や役割行動が多様化することが予想される。

引用文献

- 東 清和・小倉千加子 1984 性役割の心理. 大日本図書, pp.143-147.
- 伊藤富美 1986 夫妻間の勢力関係の類型. 風間書房, pp.35-57.
- 伊藤富美 1988 妻の役割の道具性と表出性に対する夫の評価. 日本家政学会誌, 39,793-802.
- 黒川正流・坂田桐子 1988 家事分担に関する研究(1) -ステレオタイプ認知と自分の態度-. 広島大学総合科学部紀要Ⅲ, 第12巻, pp.31-43.
- 坂田桐子・黒川正流 1989 家事分担に関する研究(2) -妻の家庭外就業による決定権と家事分担の変化-. 広島大学総合科学部紀要Ⅲ, 第13巻, pp.11-26.
- 袖井孝子 1987 婦人労働と家庭生活. 雇用促進事業団雇用職業総合研究所(編) 女子労働の新時代 -キャッチ・アップを超えて-. 東京大学出版会, pp.193-239.
- Spence, J. T. & Helmreich, R. 1972 "The Attitudes Toward Women Scale: An objective instrument to measure attitudes toward the rights and roles of women in contemporary society." *Journal Supplement Abstract Service Catalog of Selected Documents in Psychology*. 2,66-67.
- 労働省婦人局(編) 1990 平成元年版「婦人労働の実状」. 大蔵省印刷局
- Wolfe, D. M. 1959 Power and authority in the family. In D. Cartwright (Ed.), *Studies in social power*. Ann Arbor, Michigan: Institute for Social Research, University of Michigan. pp.99-117.